アルテス ARTES

DIGITAL MONTHLY MAGAZINE
FOR MUSIC AND CULTURE

OCT. 2013

ARTES

ジャンル無用の音楽言論誌！

有馬純寿
石田昌隆
大谷能生
小野幸恵
片山杜秀
金子智太郎
近藤譲（椎名亮輔）
サラーム海上
鈴木治行
濱田芳通
細川周平
安田寛
山崎浩太郎
山崎春美
ヲノサトル

●このファイルについて

本誌は『アルテス』電子版のPDFファイルです。
iphone、iPadでの購読に便利なEPUBファイルも
配信しますので、合わせてご利用ください。
本誌の購読方法、読み方など詳細については本誌サイト
「購読のご案内」をご覧ください。
http://www.artespublishing.com/dbook_artes/

ロゴ・デザイン：宮一紀
表紙イラストレーション：へびつかい
表紙デザイン：折田烈（餅屋デザイン）

ジャンル無用の音楽言論誌!

アルテス

OCT. 2013
CONTENTS

005 **山崎浩太郎**／新連載 帝都クラシック探訪〜音楽都市TOKYOを歩く
①陸軍とレコードの街、渋谷（上） **ゲスト／片山杜秀**

018 **サラーム海上**／新連載 ボリウッド新世紀——サラームのインド映画＆音楽紀行
①衝撃の出会い〜『ディル・セ〜心から』

026 **片山杜秀**／新連載 片山杜秀の“昭和日記”
①チェルノブイリ原発事故のころ

034 **安田寛**／新連載 音痴と日本文化
①日本の音楽教育は音痴矯正実験だった

042 **有馬純寿＆ヲノサトル**／新連載 電子音楽クルージング——現代音楽からEDMまで
①サンプリングの思想と文化

057 **石田昌隆**／音のある遠景
⑤ベイルートからベッカー高原を越えてシリアの首都ダマスカスへ

068 **細川周平**／新連載 日々是好音——細川周平の音楽時評
①清水靖晃＋カール・ストーン『Just Breathing』

074 **大谷能生**／新連載 ブック・レビュー [和書] 竹田賢一『地表に蠢く音楽ども』
①執筆活動もまた、あらたな世界を切り開くための「闘い」である

079 **金子智太郎**／新連載 ブック・レビュー [洋書] Cathy Lane & Angus Carlyle, In the Field: The Art of Field Recording
①フィールド・レコーディングから聴こえる自己

083 **濱田芳通**／歌の心を究むべし
⑤古楽と即興演奏

088 **鈴木治行**／イマジナリア
⑤サイレント映画の音楽(1)

093 **山崎春美**／ロッカウェイビーチ⑤

099 **椎名亮輔**／短期集中連載 特別インタビュー・近藤譲(作曲家)
「線の音楽は今」③(最終回)

113 **小野幸恵**／和の変容
④柔らかくたくましい「奈良晒(さらし)」の布巾

121 編集後記

124 奥付

ジャンル無用の音楽言論誌!
アルテス
OCT. 2013
CONTENTS

◉新連載

帝都クラシック探訪
――音楽都市TOKYOを歩く

第１回　陸軍とレコードの街、渋谷（上）

文●山崎浩太郎　ゲスト●片山杜秀

―――クラシック音楽の演奏史を生き生きと伝える音楽史譚家・山崎浩太郎氏が、ゲストといっしょに、東京の音楽生活を彩ってきた数々の音楽ホールやレコード店などを、その土地の歴史とともに紹介する新連載。第１回は評論家で政治思想史研究者の片山杜秀さんとともに「軍都・渋谷」を歩きます。

［2013年2月20日／取材・写真・構成：編集部／イラスト・地図：せとらデザイン］

◉新連載

ボリウッド新世紀
――サラームのインド映画＆音楽紀行

第1回　衝撃の出会い〜『ディル・セ〜心から』

文●サラーム海上

――日本でも大ヒットした『ムトゥ 踊るマハラジャ』（1995年）から『きっと、うまくいく』（2009年）に至るまで、ハリウッドならぬ“ボリウッド”産を中心とするインド映画は今や世界を席巻しています。毎年インドに通い、古典から最新のサウンドまでインド音楽もよく知る“エキゾライター”サラーム海上さんに、めくるめくボリウッド映画とその音楽を案内してもらいましょう。

※「ボリウッド映画」は、インド最大の都市ムンバイを拠点に作られるヒンディー語の映画のこと。20を超える言語で年間総数約1600本もの映画が作られる世界一の映画大国インドにおいて、もっともメジャーな全国区の映画である。ムンバイの旧名「ボンベイ」と映画の都「ハリウッド」をもじってこう呼ばれる。

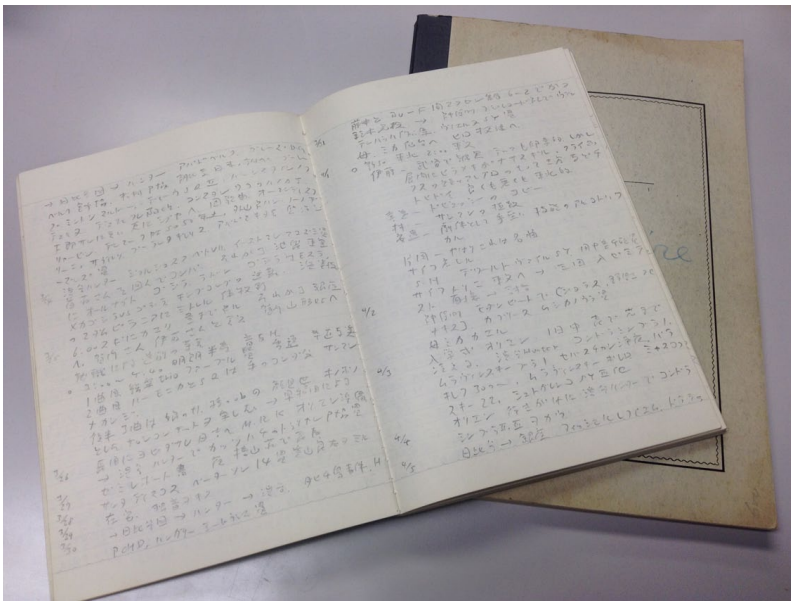
ボリウッド映画元年！

2013年は日本におけるボリウッド映画の元年になった。と言ってしまおう。これまで映画祭などで限定的に上映されてきた2007年の大ヒット映画『恋する輪廻 オーム・シャンティ・オーム』が3月に一般公開されたのをはじめ、2009年から2012年にインドで大ヒットした4作品『きっと、うまくいく』『タイガー　伝説のスパイ』『命ある限り』『闇の帝王DONベルリン強奪作戦』がまとめて“ボリウッド4”と銘打って全国公開された。その中でもエリート理系大学生の自分探し学園ドラマ『きっと、うまくいく』は、インド映画史上興行収入No.1を記録。あの

片山杜秀の“昭和日記”

第1回　チェルノブイリ原発事故のころ

文●片山杜秀



前口上

論に憧れた。昔のことである。作家や思想家を読み破る。劇作家を観倒し、作曲家を聴き倒す。批評の花道である。1000頁の書物を1000字でぶったぎる。3時間のオペラを600字で片付ける。本質を抉り出すというやつだ。明快に腑分けするというやつだ。名外科医のように。『白い巨塔』の財前教授のように。

いまでも憧れていないわけではない。批評家の看板も出している。憧

音痴と日本文化

第1回　日本の音楽教育は音痴矯正実験だった

文●安田寛

――日本の音楽教育の歴史に、「音痴」という視点から新たな光を当てる新連載。東書WEB「音楽専門館」における連載「音痴と日本人」（全14回完結。アルテスから近日単行本化予定）の続編にあたり、さらに壮大な“文明論”が展開されていきます。

「唱歌」という壮大な実験

筆者は日本の音楽教育の歴史を研究しているが、音楽教育について論を張ろうとすると、どうしても真面目にかまえてしまい、建前が先行するところがある。つまり、近代化が成ったばかりの新国家と新国民にふさわしい近代音楽教育を、伊澤修二という人物が大活躍してボストンから輸入した、というわけである。壮麗な建前に視界をふさがれると真実が見えにくくなる。だから、この連載では最初から建前を取り払い、大胆な「仮説」から始めてみようと思う。

その仮説とは、日本の音楽教育の端緒は、端的にみるなら、じつは1877年にボストンでおこなわれた小さな実験が、日本全国の小学校に拡散したにすぎない――というものである。

証拠はある。1878年（明治11）5月にアメリカから帰国した30歳前の若き官費留学生が携えていた品――彼は在ボストンの留学生監督官から、時の文部次官宛に奇妙な届け物を託されていた。当事者たちが「唱

◉新連載

有馬純寿×ヲノサトルの電子音楽クルージング――現代音楽からEDMまで

第1回　サンプリングの思想と文化

対談●**有馬純寿×ヲノサトル**

――現代音楽の電子音響演奏の第一人者・有馬純寿さんと、ポップスから現代音楽まで幅広いジャンルで活躍するヲノサトルさんの対談は、『アルテス』誌（紙）上で「Macと作曲」「録音という欲望」「ケージというOS」と3回続きましたが、電子版では「電子音楽クルージング」と題して、装いもあらたにスタート！ 今月は、音楽、ポップ・カルチャー、思想など広く大きな影響をおよぼした「サンプリング」をテーマにお送りします。

サンプラーがもたらしたもの

ヲノ　サンプリングを語るには、サウンドとしてのサンプリング、ポップ・カルチャーのなかでのサンプリング、さらに法制度や倫理の問題、美学的な意味など、さまざまな切り口があるよね。サンプリングに注目が集まった1990年前後は、椹木野衣さんの『シミュレーショニズム』［洋泉社、1991／河出文庫、1994／増補版＝ちくま学芸文庫、2001］に代表されるように、一種の芸術論としてサンプリングが語られたけど、あれはテクノロジーとしてのサンプリングというものが目新しかったからなんじゃないかと。

有馬　ちょうどそのころ、『MUSIC TODAY QUARTERLY』という武満徹さんが監修していた雑誌の編集部にいて、「サンプリングWHAT'S NEXT」という特集を企画したんだよ［第10号、1990］。椹木さんのほか三輪眞弘さん、大友良英さん、上野俊哉さんらにも書いていただいたん

音のある遠景

第5回　ベイルートからベッカー高原を越えてシリアの首都ダマスカスへ

写真と文●**石田昌隆**

――「壁」が崩れる直前、1989年初頭のベルリンに始まり、パリ、キューバ、エルサレム～ガザ地区と続いてきた、“音楽の発火点”を求める旅。連載第5回は97～98年、アル＝アサド時代のダマスカスからシリアを行きます。

1998.1.3　シリアでは、2011年4月以後、バッシャール・アル＝アサドの政府軍による空爆で夥しい数の民間人が虐殺されている。これは15年前にダマスカス旧市街にある老舗レストランで見たスーフィーの旋回舞踏。宗派に関係なく誰でも来ていた。

日々是好音——細川周平の音楽時評

第1回　清水靖晃＋カール・ストーン『Just Breathing』

文●細川周平

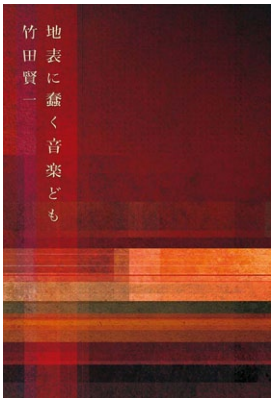
———2メートルを超す化け物の一音に劇場が震えた……
岡田暁生さんと細川周平さんのおふたりにひと月ごとに交替で「とっておきの」音楽体験をシェアしていただく音楽時評コーナー。細川さんが初回でとりあげるのは、あいちトリエンナーレ2013でのサックス奏者・清水靖晃とラップトップ・コンピュータを操るカール・ストーンの協演。

サックス奏者清水靖晃はめったに舞台に上がらない。彼の名をジャズ界の外に知らしめたバッハの『無伴奏チェロ組曲』のサックス独奏版にしても、ナマで聴けた者はごくわずかだ。70年代後半、いわゆるジャズ・フュージョンで名を上げた頃には、あるジャズ雑誌が年間ライブ数第1位のミュージシャンに数えたというのが信じられない。しかしスタジオで完結しているわけではない。年に数回のライブにかける意気込みは激しく、長い時間をかけて準備され、そのたびごとに新たな工夫が凝らされる。念入りにリハーサルを積めば積むほど、演奏の内容は安定する（当人は職人化する）はずだが、いつもその夜一回限りしか起きない不安定な瞬間、魔法の場に聴衆は立ち会う。それはライブの一回性という当然の言い分を飛び越えた出来事で、演奏家の特異な質が呼び込んだとしか思えない。聴衆はエネルギーの爆発にぶつかって有頂天に舞い上がり、すっきりするのではなく、何かわだかまりが残り、だからといって不満でもない妙な気持で帰途につく。彼と話しているとよく出る「ムラムラ」

竹田賢一著『地表に蠢く音楽ども』(月曜社、2013)

執筆活動もまた、あらたな世界を切り開くための「闘い」である。

文●**大谷能生**



竹田賢一著『地表に蠢く音楽ども』
(月曜社、2013)

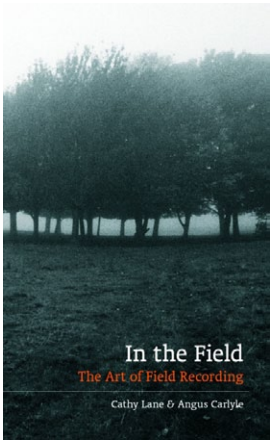
———批評家として、音楽家として、質の高い仕事を続けている大谷能生さんに、『アルテス』では書評家として参加していただきます。この連載では、日本語で書かれた音楽書の新刊をおもにとりあげていきます。1冊目は今年ついに刊行された竹田賢一さん初の単行本『地表に蠢く音楽ども』。

しばらく沈黙していた演奏者が、あるタイミングで楽曲のなかに放り込んだ一音によって、それまで聴こえていた音の風景ががらっと変わってしまう、ということが、即興演奏のステージではままある。もうとっくに自身の作業を終えて、静かに終わりを待っているように見えていたインプロヴァイザーの身体のなかに、しかし、実はまったく途切れずに波打ち続けていたビートが、ふとした手の動きでふたたび時間のなかにあらわれ、こちらの勝手な想像を追い越して、それまでの素材にあらたな構造を与えて活性化させてゆく—— そんな演奏をぼくはこれまでに何度も経験してきた。まったく音がない状態にあっても、うすくながく呼吸を続けながら、即興演奏者たちは自身の対象から意識を離さない。休符でも待機でもフェルマータでもないその沈黙には、まだ正確な言葉が与えられてはいないように思う。

Cathy Lane & Angus Carlyle, *In the Field: The Art of Field Recording*

フィールド・レコーディングから聴こえる自己

文●**金子智太郎**



Uniformbooks, 2013

――今月から和書と洋書、それぞれの書評連載がスタートします。日本語で書かれた本は大谷能生さんに新たに担当していただき、こちら洋書のほうは『アルテス』1〜4号に引き続き、美学と聴覚文化論を専門とする研究者・金子智太郎さんに選書とレビューをお願いしています。

環境の音を録音する実践、フィールド・レコーディングに取り組む作家たちは、マイクとスピーカーを通じて何を聴き取ろうとしているのか。本書はロンドン芸術大学に拠点を置くCRiSAP（Creative Research into Sound Arts Practice）の共同ディレクターを務めるキャシー・レーンとアンガス・カーライルによる、18名のフィールド・レコーディストへのインタビュー集だ。今年2月には本書と同名のシンポジウムも開催され、この実践をめぐって議論が交わされた。大英博物館に残された貴重な過去の音源も公開されたという。

インタビュアーであるレーンとカーライルの関心の中心は、フィールド・レコーディングとは何かという問いかけではなく、環境の音を録音する活動にこめられた多様な欲望にあるのではないかと思う。序文で著者たちはいくつかの問いをあらかじめ立てている。順にあげると、「な

歌の心を究むべし

第5回　古楽と即興演奏

文●濱田芳通

―――楽譜が完全なスコアとして存在しない古楽の演奏は、音楽のあるべき姿をもとめる考古学であるだけでなく、アグレッシヴな創造的解釈と精神の飛躍が求められます。いまもっとも刺激的な古楽グループのひとつ「アントネッロ」を率いる濱田芳通さんが、みずからの「古楽の冒険」を生き生きと綴ります。

クラシック音楽は楽譜どおりに演奏するイメージが強いが、時代をさかのぼれば、そこには「即興演奏」が存在していたことをご存知だろうか？

バッハもモーツァルトもベートーヴェンも、今日、「大作曲家」と称される人たちはいずれも、同時にすぐれた即興演奏家でもあった。メロディー・メイキングの方法にしても、ベートーヴェンの時代くらいまでは、フレーズからフレーズへと紡ぎ出すように展開する手法が顕著であり、このことは即興演奏の特徴ともいえるから、練り上げて書くというよりは即興的だったことがわかる。つまり作曲といえども、五線紙にペンを下ろす前のイメージの段階では、即興的要素が多分にあったことは忘れてはならないだろう。

また、楽譜の役割にしても、いまと同じかどうかは疑問だ。おそらく現代とは異なって、録音技術がない時代ゆえ、偉大な作曲家兼プレイヤーたちの演奏記録を兼ねてもいただろう。とくに同業者にとっては、じっ

イマジナリア

第5回　サイレント映画の音楽（1）

文●鈴木治行

――作曲家・鈴木治行さんが、自作の『語りもの』シリーズを例にとりながら、「音とイメージ」による表現のあり方を探ってきた本連載。この第5回からは題材をサイレント映画に移し、さらなる可能性を追っていきます。鈴木さんはこれまで諏訪敦彦監督らの新作映画の音楽を手がけるとともに、過去のサイレント映画作品に音を付けるというライヴも何度か試みています。

さて、前号まで自作「語りもの」シリーズを元に音とイメージの可能性を探ってきたが、いったん現時点での最新作まで到達したので、ここで「語りもの」からは離れ、いったん方向を転換することにしよう。転換した先に立ち現れるのはサイレント映画である。サイレントという以上、本来そこに音は存在しないのだが、フィルムには定着されていなくとも人は後付けでサイレントフィルムに音をつけないではいられなかった。そこでの音とイメージのありようは果たして通常のトーキーと同じなのだろうか？

サイレント映画に音楽をつける試みは映画の初期から行われ、現在に至るも脈々と行われ続けているが、考えてみると、現代の人間が昔の映画に音楽をつけるというのは、作者がとっくにこの世を去っている作品に、その作者の与り知らぬところで「勝手に」音楽を加えるということだ。それは言ってみれば、ダ・ヴィンチの絵画に後世の人間が何かを描

ロッカウエイビーチ（5）

文●山崎春美

いや、正しくは、囁こうとしたに過ぎない。

突然あらわれた四人の男たちに取り囲まれて、自称ありくとあたしは、逃げも避けもせずにただ無視して、そのまま歩き過ぎようとしていた。

そのうちの一人が、ありくの耳元に顔ごと近づいて、なにごとかを耳打ちしようとした。が、果たせはしなかった。

そこまでで途絶えてしまったからだ。

その男が実はインシュリンと注射器を常時肌身離さなかろうが、代々心臓麻痺の多い家系だろうが、脳出血もしくは脳梗塞だろうが、死因は撃ち殺されたのである。抹殺されたのだ。虫の息さえ聞こえなくなってしまった残骸の「残」は、「残ったムクロ」ではない、「残虐」の残、「残酷」の残。

誰が誰にって？　ええ？

補足すると、主語をわたしに移管すれば、動詞は、ぶち殺した、となる。

時代は現代である。

ありくの耳元で、どうやらあたしにだけは聞こえないように気を使いながら、なにごとか伝えようとしたこの男を、仮に4分の1号と呼ぶとして、1/4号はあたしたちを取り巻いている避難口を残らず塞ぎ、袋の鼠にしてから出口なき路地裏の迷路の奥に追い込んで、この際なので関係者ともども一人ずつ、時間をかけてゆっくり、虐殺しようとするのだ。

口癖があって、誰がいようが同席しようがお構いなしに言い放つ。

「ジブンのカラダの肉が腐敗して、匂い立つ悪臭に包まれながら死に

近藤譲［作曲家］
「線の音楽」は今 —— 第3回（最終回）

聞き手●椎名亮輔

——1970年代から「線の音楽」という創作手法で知られ、独自のポジションを築いてきた作曲家・近藤譲さん。昨年アメリカ文化・芸術アカデミーの外国人名誉会員に選ばれるなど、名実ともに日本を代表する作曲家としての名望を新たにした。長年交流を続けてきた椎名亮輔さんがその作曲法の秘密にせまる。

「線の音楽」前史

——— ここまでは、「歴史のなかの近藤譲」というお話でしたが、こんどは近藤譲さんのなかでの様式の変化についてお聞きしたいと思います。そういう変化はあるんですか？

近藤　自分ではあまり意識していないんですけど、結果としてはありますよね。

———「線の音楽」というのがいちばん最初にあると思うんですけど、「線の音楽」以前というのはあるんですか。

近藤　ありますけど、学生時代ですね。ですから、いろんな人の真似です。ようするに、まあ嫌な言い方だけれど、自分がやりたいことを探して、いろいろやってみるという時代で。ベリオの真似をしてみたり、ルトスワフスキの真似をしてみたり、クセナキスの真似をしてみたり、アシュリーの真似をしてみたり、という時代がずっとあって、それである日、《オリエント・オリエンテーション》［1973］みたいなのを書いてみ

和の変容

第４回　柔らかくたくましい「奈良晒（さらし）」の布巾

文●小野幸恵

———「和」の潜在的な魅力と新たな可能性を追いながら、さまざまなアートシーンを紹介する「和の変容」。
奈良は、江戸時代から麻織物の一大生産地。彼の地の麻をとくに「奈良晒」という。風合いといい使い心地といい、他の追従を許さない。現代に生きる先人の知恵そのものだ。（取材協力：株式会社中川政七商店）

青苧（あおそ）を績んで撚りをかけた糸。手績みの糸は自然の光沢が美しい

大和を舞台にした文楽『妹背婦女庭訓（いもせやまおんなていきん）』「道行恋苧環（みちゆきこいのおだまき）」は、三輪山伝説にちなんだ物語である。主人公のお三輪が手にする苧環（おだまき）の糸が麻であることに気づいたのは、麻織物が奈良の特産であることを知ったからであった──。

麻の布巾、その手応え

もう30年以上も昔のこと、仕事でお付き合いのあった建築家の奥様から、1枚の布巾をいただいた。それが、生まれて初めて手にした麻の布巾であった。

真っ白ではなく生成りの麻色で、しっかりと糊が効いていて、とても布巾とは思えない手触りに驚いた。高価そうな包みであったこともあり、はたして日常の台所用に使えるものなのか疑わしかったが、包みには「ふきん」と書いてあったので、とにかく水を通して糊を洗い流してみた。

白濁した糊がずんずん流れ出てしまうと、驚いたことに、ゴワゴワだった麻布は、ふんわりと滑らかでガーゼのように柔らかくなった。

いったん乾かすと、ふわふわと心地よい。強く撚りをかけられた太い麻糸でザックリと織られているからだ。

その粗い目が水分を吸うことで詰まるために、吸水性は群を抜いて素晴らしい。食器を拭いても細かい繊維が残ることもなく、布巾としてじつにたくましい逸品であった。

たいせつに長く使って、最後は台拭きになり、繊維が痩せて破れるまで重宝した。

ふたたびこれと同じような布巾に出逢うまで、なんと20年以上もかかってしまった。その間、木綿で織った同じようなものやヨーロッパ・リネンのシャキッとしたものを使っていたが、どうしてもかつての布巾の使い心地が忘れられないでいた。

ある日、偶然百貨店でみつけ、その製造元が奈良であることを知ってからは、機会があるごとに買い求めてたいせつに使っている。少しばかり高価ではあるが、それも品質の確かさを裏打ちしているようで、使い心地には満足至極である。

編集後記

足の下に埋れた音楽史を掘り起こす

地方で生まれ育って大学入学と同時に東京に出てきたせいで、東京のなかを移動する手段といえば、電車がメインだった。地名が、線と点でしか頭に入っていないので、いまだに、地図を見たり、たまにタクシーに乗ったりすると、「○○線の□□駅と△△線の◇◇駅って、こんなに近かったのか」とか「●●って■■駅からも行けたのか」といった発見をすることが多い。いっぽうで、古くからある音楽ホールなどに行くと、常連客でないと感じ取れないような、その場所の歴史が醸し出す独特の雰囲気が感じられ、「こういうのは地方出身者にはわからないんだな」とちょっと寂しい思いをすることもあった。

そんなとき、「音楽史譚」を標榜する評論家の山崎浩太郎さんとFacebook上で語らう機会があって、山崎さんの「街歩き」に同道させてもらうことになった。新宿区に住む山崎さんは暇を見つけては東京の各所を歩き、中沢新一の『アースダイバー』さながら、土地の来歴や地形を足で感じることから、独自の「東京音楽史」をひとり夢想されていたのだが、「それをぜひかたちにしましょう」というわけだ。たまに酒の肴に聞かせてもらう話もめっぽう面白いのだが、やはりここは自分もいっしょに歩いて「足の裏で感じる音楽史」を実感してみたい（運動不足解消、という別の目的もあったが……）。

山崎さんが音楽街歩きの最初に選んだのが渋谷。その地名からも起伏に富んだ地形が想像されるが、いままでNHKホール、Bunkamura、PARCO、ジアンジアン……と上物だけは知っていても、その下に横たわる土地を感じて歩いたことはなかった。聞けば、NHKホールや渋谷公会堂のある場所は、もともと日本陸軍の軍用地であったらしい。となれば、日本近代史に詳しい片山杜秀さんにも同行してもらおう――。

そんな流れで実現したのが、今月号の冒頭に掲載した新連載「帝都クラシック探訪――音楽都市TOKYOを歩く」だ。渋谷篇は「軍都・渋谷

を歩く」と題して、全3回にわたって毎月掲載。その後は上野、新宿、四ツ谷〜六本木と続く予定。音楽版「アースダイバー」なのか「ブラタモリ」なのか「路上観察学会」なのか、よくわからないが、山崎さんと街を歩くたびに、その本で読んだ歴史が文字どおり「地に足のついた」ものになっていくその実感を、ぜひとも読者のみなさんにも味わっていただきたいと思う。［木村 元］

ふたつの書店

昨夏に刊行した『みんなの家。建築家一年生の初仕事』の著者であり、わが祥雲荘（自宅です）を設計してくれた建築家・光嶋裕介さんの結婚式と披露宴に出席するため、9月末に神戸へ出かけた。式の翌日、『みんなの家。』を韓国語に翻訳してくれている朴先生をジュンク堂書店に案内したあと、その日を最後に100年近い歴史に幕を閉じようとしていた元町の海文堂書店を訪ねることができた。

アルテスの創業1冊目、内田樹著『村上春樹にご用心』をお店のブログで紹介してくれた平野さんと、2011年4月にアルテスを含む4社合同フェア「小出版社の冒険」を企画してくれた北村さんのお二人に御礼を言いたかったのだ。ごった返す店内で会えたお二人はともに吹っ切れたような笑顔を見せてくれて、ちょっとホッとする思いだった。閉店のニュースを知るが早いか神戸に飛び、『海文堂書店の8月7日と17日』という写真集を制作した夏葉社の島田さんのご紹介で店長さんにご挨拶したり、『本の雑誌』のために取材をしていた140Bの青山さんとお喋りしたりとバタバタしながら、わずか30分ほどでしたが、名店の最後を見届けたのでした（『海文堂書店絵図1914-2013』もしっかりゲット）。

その2週間後にはアルテスのスタッフ長谷君の結婚式で京都へ。披露宴のあと叡山電車に乗って一乗寺駅で下車、念願だった恵文社一乗寺店を訪ねてきた。雑誌で書店の特集が組まれると必ずといっていいほど登場する、だれもが知る名書店だが、なかなか足を運べずにいた。店内の静けさとお客さんの多さに驚きながら、見応えのある品揃えをじっくり拝見。つい色々欲しくなったけど、我慢して4冊だけレジへ。こういう

素晴らしい書店のけして大きくはない音楽書の棚で、アルテスの本が存在感を示しているのは、本当にありがたいことです。

さて、今月スタートした新連載は8本。次号以降さらにピーター・バラカンさん、椿正雄さん（下北沢フラッシュディスクランチ）、鈴木英之さん、矢澤孝樹さん＋広瀬大介さんが加わります。

最後にお知らせ。お茶の水に10月オープンしたばかりのエスパス・ビブリオで、11月19日（火）19時から電子版音楽誌3誌の編集長座談会を開催します。出演は『ERIS』の高橋健太郎さん、『サウンド＆レコーディング・マガジン』の國崎晋さん、そして鈴木。詳細はこちらをご覧ください。

［鈴木 茂］

アルテス

2013年10月31日　初版発行

Web	http://www.artespublishing.com/dbook_artes/
Twitter	https://twitter.com/artespublishing
Facebook	https://www.facebook.com/magazineartes
発行者	鈴木茂・木村元
発行・発売	(株)アルテスパブリッシング 〒155-0032　東京都世田谷区代沢5-16-23-303 http://www.artespublishing.com/
デザイン	折田烈(餅屋デザイン)　http://www.mochiya.nu/
表紙イラストレーション	へびつかい　http://hebi.soragoto.net/
ロゴ・デザイン	宮一紀
DTP	浜田淳
Web制作	小濱海代
編集協力	公魚(渡邊未帆、高橋智子)

ISBN978-4-903951-74-4

※本誌に関するお問合わせはウェブサイトのフォームよりお願いいたします。
http://www.artespublishing.com/dbook_artes/contacts.html
※本誌に掲載されている文章、写真、イラストレーションなどの著作権はそれぞれの著作者に帰属します。本誌の内容の引用あるいは複製、転載など著作権に関わる行為については現行の著作権法に従って行なってください。また、本誌のご紹介、ご批評は大歓迎ですが、転載をご希望の際は上記のお問合わせフォームから弊社までご連絡ください。
※本誌は原則として毎月１回配信します。